

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第4号 野菜

発行日 平成23年 6月29日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4435)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆施設果菜類 換気の徹底、適切な肥培管理・水分管理と病害虫防除を！
- ◆露地きゅうり 生育に応じた整枝・摘葉管理と病害虫防除を！
- ◆雨よけほうれんそう 天候の変化に応じた適切な管理を！
- ◆露地葉茎菜類 病害虫防除の徹底と計画的な作業により良品出荷を！

1 生育概況

- (1) 施設果菜類は順次収穫が行われています。早熟作型のきゅうりは概ね順調ですが、一部で成り疲れやうどんこ病等の病害の発生がみられています。雨よけトマトの収穫開始は例年より1週間程度遅れたほか、灰色かび病の発生がみられています。ピーマンの生育は概ね順調ですが、アブラムシやアザミウマの発生がみられています。
- (2) 露地果菜類の定植は終了しました。露地きゅうりや露地ピーマンは定植後の乾燥により生育が停滞したほ場が一部でみられました。
- (3) ほうれんそうの生育は概ね良好ですが、強風や乾燥によるとみられる葉先枯れが各地で発生しているほか、ケナガコナダニの被害や萎凋病等による立ち枯れ症状も見られています。
- (4) キャベツは例年より1週間程度遅れて県北部でも収穫が始まりました。定植作業や生育は順調ですが、ナモグリバエ、コナガの発生がやや多くなっています。レタスは平場地帯で出荷が終盤となり、県北部、高冷地からの出荷が始まっています。ナモグリバエの発生は概して少なめですが、高温・乾燥傾向により活着や球の肥大が緩慢な状況が見受けられます。

2 大雨に伴う事後対策

- (1) 6/23からの断続的な大雨により、茎葉の損傷、冠水被害が発生しています。傷んだ茎葉や果実は摘除し、茎葉に泥土が付着している場合は動力噴霧機により水をかけて洗い流すとともに、品目ごとの防除指針に従って殺菌剤を散布し、病害の発生・拡大を未然に防止します。
- (2) 圃場に滞水している場合は、ポンプなども活用して速やかに排水してください。排水後、圃場作業が可能になったら畦間の中耕を行って土壌中に空気を送り、根の活性化に努めます。必要に応じて液肥を薄い倍率でかん注または葉面散布し、草勢回復を促します。
- (3) 今後も大雨に備えて、排水溝の整備・点検を行います。特に、圃場外からの侵入水を防止するため、圃場やハウスの周囲にあらかじめ排水溝を設けておきましょう。

3 技術対策

- (1) ハウス果菜類の管理

ア 雨よけトマト

雨よけ栽培では、収穫開始時期を迎え草勢のバランスを崩しやすい時期に入ります。着果量や

生長点付近の状態（生長点の大きさ、葉色、葉の巻き具合、茎の太さ）を確認しながら、適切な追肥やかん水により草勢を維持することがポイントになります。つる下げ作業も、一気に下げてしまうと極端に草勢を落としますので、こまめに行うようにしましょう。

特に、6月中旬の高温乾燥時期に水不足から生理障害、草勢低下を引き起こしている事例が見受けられますので、天候に応じたかん水施肥管理を行って下さい。

また、降雨とともに灰色かび病や葉かび病の発生が多くなってきますので、曇天時でもこまめに換気し、かん水は晴れた日の午前中に行うようにして、できるだけハウス内の湿度を高めないようにします。曇雨天時のわき芽かき作業は、病気を伝染する場合がありますので、晴天時に作業するようにして下さい。薬剤防除は灰色かび病や葉かび病、アザミウマ類、アブラムシ類の防除を基本とした薬剤を選定し適期防除に努めます。

イ 雨よけピーマン

4本仕立ての整枝法は、第10分枝まで側枝3～4節摘心、第11分枝以降は2節摘心が基本です。側枝を伸ばして着果数を多くすると草勢が低下しやすくなるので、株の下まで光が当たるように側枝の摘心を行います。

特に「京鈴」は、収穫や整枝作業が遅れないようにし、かん水と追肥は少量多回数を基本に行い、草勢を低下させないよう管理に努めます。

また、圃場への浸水や多かん水により株元が過湿となると疫病が発生しやすく、乾燥してくると尻腐果の発生が目立ってきますので、pFメーターを目安として水分管理を行うとともに、今後は株元を乾かすような管理を心がけましょう。

一方、病害は灰色かび病が発生しやすい時期です。雨よけトマト同様こまめに換気を行いハウス内の湿度を高めないようにします。害虫は高温とともにアザミウマ類やハダニ類が多発してきますので、アザミウマ類は花の内部を、ハダニ類は葉の裏側をよく観察し適期防除に努めます。

ウ 夏期高温期の昇温抑制対策

夏期高温に備え遮光幕や塗布型遮光剤を利用した昇温抑制対策の実施を検討しますが、資材の種類により効果の持続性に差があるので考慮して利用してください（下図参照）。

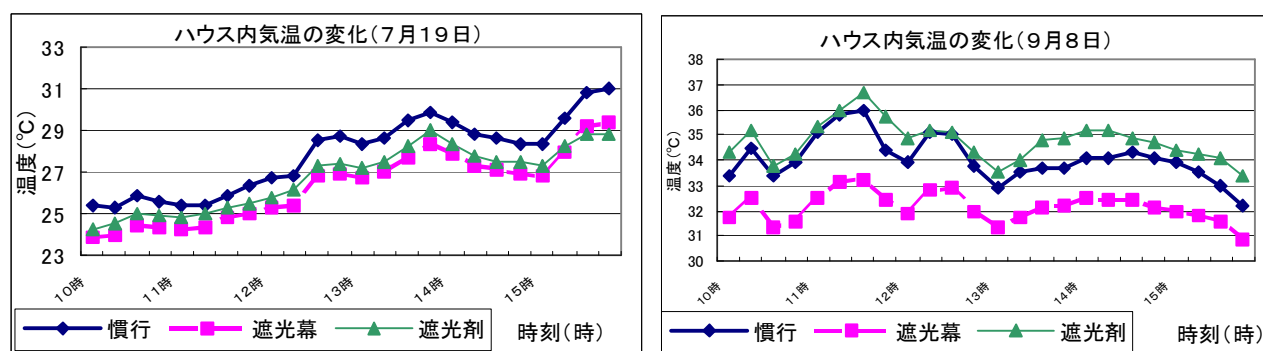


図 遮光幕及び塗布型遮光剤の温度抑制効果(農業改良普及センター実証結果より抜粋)

- 備考) 1. 塗布型遮光剤は平成18年6月19日に吹き付けし、遮光幕は同年6月29日にハウス一面を被覆した。
2. 遮光幕は長期間にわたり安定して温度抑制効果が高い。一方、塗布型遮光剤は吹き付け1ヶ月間位までの効果は高いが、処理約3ヶ月後には効果はみられなくなった。

(2) 露地きゅうり

本格的な収穫を迎える時期となりました。収穫量に応じた追肥とかん水で草勢を確保します。特

に乾燥気味の圃場では、かん水や敷きわらなどで土壌水分の保持を図ります。また、1本仕立ての場合の生育中期～盛期における基本的な整枝、摘葉管理は下表を参考に行います。

ただし、品種や草勢により管理技術は多少異なりますので、あくまでも目安としてください。

表1 生育中期～盛期の整枝、摘葉方法（例）

	子づる	孫づる	整枝のポイント	摘葉のポイント	その他
上段	1節摘心	半放任とし、混み合った部分のみ摘心する	1. 親づるは、生育が順調な場合は支柱の肩の部分で止めるが、上段の子づるの発生が悪い場合、発生が緩慢な品種、親づるの心が小さい場合は遅く止める	1. 台木や穂木の子葉は摘除する 2. 病葉や老化葉を優先的に摘除するが、子づる、孫づるの生長点を覆っている葉を株当たり2～3枚/回を目安に除去する	放任枝とネット沿いに発生した子づるはテープナーでしっかり止めるが、それ以外の枝は誘引せずきゅうり全体に光が当たるよう樹を立体的に仕上げる
中段	2節摘心	1節摘心 ただし、草勢が弱い場合は早止めしない	2. 親づるの摘心後、草勢維持のため放任枝を2～3本残す。作業しやすいように腰～肩の範囲に子づるを張らせる。中段の子づるは収穫後1節残して切り戻す	3. 膝から下は摘葉し、通風を良くする 4. 親づるの摘葉は親づるの摘心後1ヶ月間を目安に終了する	
下段	1節摘心	1節摘心	3. 膝から下の子づる、孫づるは収穫後親節から切り戻す		

※下段：～10節程度。中段：11～20節程度。上段：21節～

2本仕立ての場合は、主枝8～10節から発生する側枝を、1本伸ばします。それ以外の主枝10節までの側枝は1節摘心とし、主枝11節以降は2節摘心または半放任とします。

病害虫防除では、7月はべと病や褐斑病、炭そ病等の斑点性病害の予防に重点をおきます。

なお、斑点性病害は薬剤散布による防除だけでなく、圃場内への蔓延を防ぐため疑わしい病斑が見られたら積極的に摘葉しましょう。

(3) 葉菜類の管理

ア 雨よけほうれんそう

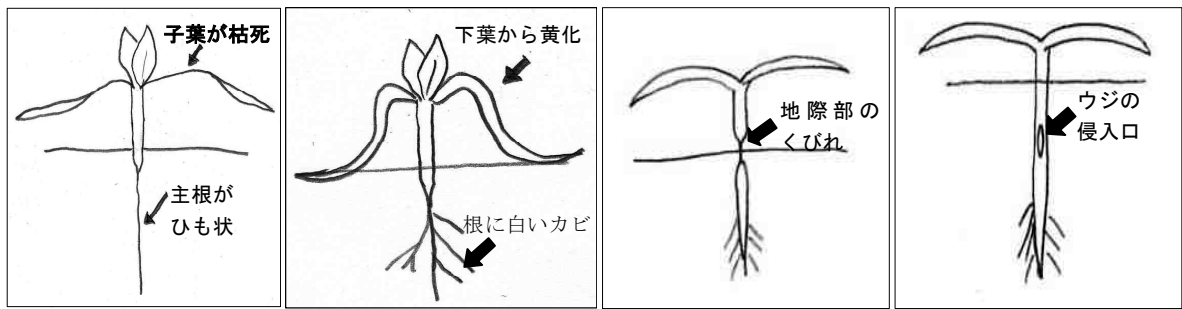
今後1か月は曇雨天の日が多く気温は並から高めと予想されています。つま面のビニール除去や遮光資材等の利用といった暑さ対策を徹底するとともに、遮光のしすぎによる徒長にも注意しましょう。

ほうれんそうの生育には厳しい時期となりますので、各産地で選定している夏播き用の品種を利用して、必要に応じて生育中のかん水も行いましょう。

地上部が萎れる原因は病害によるものだけではありません。高温障害、土壌病害虫等の判断方法は下図を参照してください。

また、圃場内へ雨水が流入したりハウス内が過湿になることがないように、圃場周囲の排水対策を確認しましょう。

この時期はべと病が発生しやすく、べと病に抵抗性のある品種でも発病する場合があります。ハウス内が過湿にならないよう換気に努めるとともに、株間を広くして風通しを良くし、被害株は随時抜き取り処分します。例年発病が多い圃場では、予防散布を徹底しましょう。



根腐病の症状

萎凋病の症状

高温障害の症状

タネバエによる被害

図2 ほうれんそう生育初期の萎れの原因の判断方法

イ キャベツ

ヨトウガの発生が増えてくる時期を迎えています。定植時の処理剤の利用を徹底するとともに、防除が遅れないように注意しましょう。コナガは薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤によるローテーション散布を基本とします。

また、収穫を終了した圃場をそのまま放置すると害虫の発生源となりますので、収穫後は早めに圃場を整理しましょう。

結球期に降雨が続くと株腐病の発生が多くなります。結球開始期から株元にも十分薬液がかかるように薬剤散布を行ってください。圃場の排水対策についても確認しましょう。

ウ レタス

気温の上昇、降水量の増加にともない、すそ枯病、軟腐病などの腐敗性病害や灰色かび病の発生が多くなります。特に大雨が引き金になって、病害が多発する場合がありますので、気象情報などを参考にして、降雨の前後の防除に重点を置きましょう。また、これから定植する作型では、排水の良い圃場を選んで作付けするとともに、前作の残渣を圃場外に持ち出す、適湿のときにマルチを張り過湿を防ぐ、といった対策を心がけましょう。

高温期の過剰施肥は変形球や腐敗の発生を招きやすいので、施肥量を控えめにすると共に、適期に収穫して品質の向上に努めましょう。

エ ねぎ

生育に応じた追肥、土寄せにより葉鞘の伸長を促しましょう。特に早出しを狙う作型では、無理に土寄せすることで葉鞘が細くなりすぎないように注意しましょう。今後、気温の上昇、降水量の増加が予想されますので、圃場の排水対策を講じます。

また、大雨直後に土寄せを行うと軟腐病など病害発生の原因にもなりますので、圃場の水分が低くなってから行うなど作業のタイミングに注意し、状況に応じて効果のある薬剤で防除してください。

次号は7月28日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう